

# 報告

## IX

### 自らへの手紙

小事務付けをしてきた幾つもの作品群をシンフォニーのよつこ組で磨くには、早急過ぎる気がしている。決して焦っているからではなく、ちろんサービスのメモリでもなく、そろそろ僕の中の虚火の疲労度が限界にきたのかもしれない。いや僕はこれ以後も自らのために希冀していくであろう我が儘への補給場所として今年10月のギャラリーサージでの発表が必要だったのである。いやいや僕は自らとしての結論を遠のかせるために、もっと正直に言えば結論のない自らが不安であり情けないからなのだ。本当に、情けないことが取すかしい。きっと取すかしさがなければ、僕は発表することできないのかもしれない。

目的があって、道を歩いている。歩いている存在は、目的までの途中である。ストップするところが目的であるとすれば、歩いていることは目的である結論から離れていることになる。迷路とでも呼べばいいのかもしれない。それでいいだろう。僕は今、迷路の中で生きているのだ。ただただ歩き続けることである。このように考えてから、僕の気持はとてモ楽になった。途中の中にいること、結論ということばかり後になっていた僕は余裕ができたのか、歩いている回りの景色の美しさが、少しずつ理解できるようになっていたのである。歩いている限り僕は永遠の幸福者でいられるのだ。

### 致

1999年6月30日午後4時過ぎ、栗石町にあるN2スタジオにO嬢から相談の電話があった。彼女は僕に、人生上の事情により今年10月のギャラリーサージでの発表は不可能かもしれないという内容を話してくれた。もちろん事情とまでモ目出度いことである。無理にやる必要はないだろうという2人の意見で一致した。さらにその電話での2人の会話の中で、僕としては1人だけでも発表する意欲のある旨を伝えたのである。電話を切った後、残念なことではあるが事情が事情なだけに至らないうだろう。と僕は深く納得していた。言語を練り直す必要がある。ただし「収穫」「食卓」として「晩餐」となる3部作は、どうしても終結しなけれまいけない。作品展示というよりは、僕自身の個人的な覚え書き調の発表に近いものなのだが、10月の時期にやらなければ次への段階に進めなくなってしまうのだ。1人だけでやることにしよう。ジョイント展ではなくなってしまうが、予定通りタイトルの方は、晩餐一子共々まい虚火4(LAST「素朴な果実シリーズ」のための考案)である。又一つ変更が増えた。いずれにしても、初声町のN2スタジオに戻ったら、ギャラリーサージに連絡をしよう

思考しなげればいけない。

昨年4月10日、O嬢と僕の2人は、ギャラリーサージに3週間という期間での使用を申し込んでいた。その3週間を、2人それぞれの個展と2人のコラボレーションによるジョイント形式で発表しようという計画であった。この計画は、僕の方からO嬢を誘ったものである。というも、昨年3月のテレコムセンターで提示した「NREPLYO」と題する作品の感触が、とても良かったからだった。「NREPLYO」は、僕の発想で始めたもので、僕が形をつくり、その形にO嬢が着色するというものだ。要約すれば、僕のプランをO嬢が仕上げるということになる。もちろんこの逆も当然あり得る。この場合は「OREPLYN」という作品になるのだ。「NREPLYO」の作品は、18個完成している。残念ながら「OREPLYN」の作品の方は、今だに完成を見ていない。いずれ機会があれば、作品化したいものだと思っている。

と3で、ギャラリーサージを予約してから長いこと僕はO嬢に何の連絡もしていなかったのである。今年1月から郷里である栗石町に帰っていたということもあるが、多分に僕の急げ癖からきているだろう。そのため、僕の方にモーションするという意思表示が弱いかのこっとく見えたのかもしれないのだ。しかも僕の方からジョイント展に関する意見のファックスを送り、O嬢からの返信を待つという遣り取りの約束までして置き、それができなかった。僕の無責任さを痛切に感じている。まあ、くたくたと弁解してもどうかなることではない。

7月12日午後、Nスタジオに戻っていた僕は1人だけでギャラリーサージを訪れた。短い時間ではあったが、ギャラリーの責任者であるS氏と相談を、予約していた3週間の期間を後半の2週間に短縮して使用させてもらうことになったのである。夕し振りの、蒸し暑い神田の町を歩きながら、初めて画廊発表してから早28年か過ぎていることをしみじみ思っていた。僕の足は自然になくなってしまったその初めての場所の方に向くのだった。もっともっと自分にならなければならない。もっともっともっと果直になりたい。暗くふりかた空から、小粒の雨が降ってきた。愛い神田の町の風景よ。

そしてその夜は、新宿ゴールデン街に行く約束になっていた。

さて、今回のギャラリーサージでの発表に関することを述べようと思う。7月15日現在、僕はまだ制作に入っていない状態である。ただし前文にも記したように、今回の発表を3部作シリーズの終幕にと考えていたので大まかなプランができてきているのは言うまでもないことである。タイトルのことは前記したのでここでは省略する。発表しようとしている作品の内容の方に話題を移そう。前の2回の発表では、それぞれNスタジオ並びにNzスタジオの合所を模した空間をつくり、その中側なり外側への集まりを意識していた。今回の場合は、Nスタジオの僕の寝室に上っている屋根裏部屋を模した空間を設営しようと考えている。しかも前の2回とも床と壁だけ天井はつらくら開かれた状態にしたのに対し、今回の場合は、天井を設け閉ざされた空間にしようとしているのだ。まさに僕のプライベートルームになる訳だ。密室である。いづれのように緑色の床以外は、すべて黄色にするつもりである。実際の屋根裏部屋の中にあるもののうちから、模した空間の中に入れようもの選りして置く。ベッド、額縁、文机用になっている棚などである。もちろん床はすべて黄色に塗られ、位置としては実際と変わらない。その他の多くのものは緑色の床の中の実際の位置に黄色い形として残されることになる。省かれるものも出てくるだろう。屋根裏部屋の中側の状態設定ができたところで、今回の発表のため

に大事な役割をする作品やものなどをプラン段階ではあるのだが、紹介して置くことにする。黄色に塗ったベッドの上に乗せるフモリでいる作品「素朴な果実」<sup>3</sup>、NREPLY<sup>3</sup>、習作「素朴な果実」(e, SF)、新作「a sherbet」、自らの顔写真、「僕の言葉」と題する自らの声の録音テープの音、赤い折り紙ライト、シャープな金属又は鏡又はガラス、そしてNEX STHEREの英文字とギャラリカーシの発表期間の数字等々である。今後、大事な役割をする作品やものなどは、増えるかもしれない減るかもしれないということは未定である。この摸した屋根裏部屋には、ドアが付いており、外側部分の一箇所に「CLOSE FREE」の英文字をくっきりと読み取ることができよう。風などが吹き抜けた場合は別だが、注意深く見ると、そのドアは通常ほんの少し開かれた状態になっている。見る者は、摸した屋根裏部屋の中に入ることは自由である。ただし、土台禁止の注意書きには、従ってもらいたい。屋根裏部屋を摸した空間の外側、つまり画廊空間の天井とか、壁とか、床とかの係わり方のプランを2つほど記して置く。1つは、百個以上あるe, SFの小作品を、画廊空間の入口のガラス扉から始まり、画廊内の壁から台所の壁へと曲がり、さらに洗面所トイレの壁を通して事務室の壁・相模などに行き着き、再び画廊空間に戻ってくるという見り方をしようというものである。もちろん同じ高さで同間隔を保っている。e, SFが、画廊内を一周する訳だ。もう1つは、画廊空間の壁だけを使用し、新作「a sherbet」を並べるというものである。S氏との本相談が必要なことではあるが、90%程17目のプランになるだろう。いよいよ13すべての展示状態のことは、いづれのことながら展覧会終了後の追加文に記されることになっている。以上が、現時点での僕の大きなプランである。

疑う余地もなく季節は、7月半ばに入っている。とにかく今の僕は最後の晩餐の準備を静かに1つひとつ着々と進めていかなければいけないのだ。

遠く遠くに見える山々から白い雪が消え、深い藍色の地肌が青空を背景に際立って力強く浮き上がっている。クリアな空気が、僕の思考まで明晰にしてくれる。N2スタジオの2階皆への足跡の場、窓から火田に眼を移すと、素直な帽子を被り作業服で身を固めた母親が、金杓を振り下ろしている。規則的に響いてくる土と金属からなる音が、とても心地好い。今年28才である。素直な帽子の下から時々見え隠れする彼女の歴史そのものでもある白髪が、太陽光線に照らされキラリと輝く。素朴さという言葉を一いつとはなしに僕は母親から教ったのかもしれない。その母親が、作業を止め、タオルで顔を拭いた。父親が病院から帰って来たらしい。父親は、もうすぐ28才を迎える。この平和でのどかな暮らしが、長くながく続くことを願いなから、僕は階下に降りた。

そんな故郷でのある1日を思い出しながら、僕は長浜海岸にある知人の海の家で晴れ渡った海を見ていた。爽やかな風が、吹いている。7月20日、海の日である。長男の誕生日でもあり、全国的に祝日になっている。2本目の缶ビールが、僕をとてモヒウな気持ちにしていく。不思議なもので、人は海を前にしているより開放的になるのかもしれない。時々海の家の中から、健康的な笑い声か聞こえてくる。どのような人世を持った人たちなのだろう。止めよう。浪の節的な発音は海にはよく合わない。ヤキそば、ラーメンと白く染め抜いた2杯の赤い漬物が、激しくはためき出した。午後4時頃になるだろうか。水平線が紺色から次第に金色に光り出し始めた。数隻の白い巾着のヨットが、ゆっくりに動いている。日焼けオイルの匂い、煮干し、煮干しが、海の家の中に漂う。一度きりかかない

夏を十分に味わうことにしよう。僕はもう1缶ビールを注文した。すべてをアラスカ  
 思考にする海は、罪と言えは罪である。苦悩を消してしまい、すべてを楽々  
 に感じさせる。強引と言えは、とても強引だ。犯罪が、起こらなければいい  
 のだが、また、止めよう。心配症的な発想は海には似合わない。僕の  
 のそばを通って行った少女の笑顔が、夏の夕暮の挨拶のように眩しい。太  
 陽に手を振った青春時代が、懐かしく蘇る。山を見ていると、じっとしてい  
 らなくなると、海を見ていると、いつまでもじっとしていられる。危険とい  
 うことを考えれば、危険なことである。山のスピードは、僕にとって早過ぎるの  
 かもいけない。海は、僕にとってただただゆっくりとしている。もちろんど  
 ちらの場合も、僕が視覚的な状況を意識している時だけの話なのだが、その山のそばに  
 もこの海のそばにも仕事場を持っていられることに何よりも感謝しなければ  
 ないだろう。そろそろ帰らなければいけない時間だ。僕は女の人に会釈を  
 し、海の家を出た。海の家の名は、「セーラー」と言う。熱く濡れた砂を踏み  
 5分程歩くと、矢作港の岩場に運送する。初声町にNスタジオを構えてから、時  
 々息抜きのためにやって来るこの小さな入江に僕は愛着を感じている。岩に  
 座り、火薬草を一服することにした。涼月の薫りが、より強くなつた。貝取  
 川に夢中になっている婦人、船のエンジンの音、子供たちの声、鳥の鳴き声、  
 波の音、見上げる空には真っ白な雲と強烈な太陽がある。信頼という音楽は、  
 父親の姿を見て学び取ったのかもしれない。

午後6時42分、僕はアトリエであるNスタジオに着いた。西瓜を食べてから、  
 夕食の準備をしよう。本当に、一度しかない夏の1日である今日を、僕はいつの  
 日か思い出すことがあるに違いない。今年の8月、僕はいよいよ50才になつて  
 いる。

曲が、流れている。Sリヒテルのテンペストが、僕の心を詩情豊かに抱擁して  
 くれる。7月の柔らかな風が、真夏の求愛を許してくれて、もういっかのように  
 何でもよんでいる。(1999年7月20日、Nスタジオにて 藤崎リナ著) ©

展示期間 = 1999年10月18日(月) ~ 30日(土)

場 所 = ギャラリー「サージ」

タイトル = 晚餐 - 子供っぽい戯れ4

(LAST「素朴な果実シリーズ」のための考案)